

野上氏金子集

第一卷

岩波書店

野上彌生子全集 第二卷

第二回配本(全二十三卷)

一九八〇年六月六日 発行

定価 三〇〇〇円

著 者 野 上 彌 生 子
の み や え こ

発 行 者 緑 川 亨
り っ け ん

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
有 限 公 司 い づ ぬ ま しょ ぽ ん

電話 〇三二六四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

目 次

縁	三
七夕さま	一七
佛の座	三七
紫苑	五二
柿羊羹	六五
お隣	八二
池畔	九七
病人	一〇五
女同士	一二七
鳩公の話	一四九

林檎	一六三
墓地を通る	一六九
墓地を通る第二	一七五
母上様	一八三
閑居	一九七
飼犬	二二一
父親と三人の娘	二三九
弾正と呼んだ鳩	二九九
虫干の半日	三〇七
秋の一日	三二五
お由	三七七
巳の吉の或日	三三九
曙の窓より	三五二
夫婦者	三八五

目 次

或日の朝食前	四〇一
後 記	四〇九

小
說
一

縁

上

縁

三重市のばゞ様と云のは、寿美子のお母様のお母様で、たつた一人の祖母様である。ばゞ様の家は江藤家といつて近郷に聞えた豪家であつたさうな。併し夫もたゞ過去といふ織物の中に一部の花模様をおいたばかりで、現在では豊薩軍記、満野長者同様の昔話になつて居る。いろはで分けたといふ何十戸前の蔵の中に、代々の主人が入れ溜めた珍宝佳什も、曾祖父様の代に馬の脊に籐蓆の荷に紛らして、毎晩々々熊本の方から府内の方へかけて運ばれてしまつた。江藤家の棟木にもだん／＼虫が這入つたのである。最後まで手放しかねた一組の能衣裳を、反古にもならぬ一枚の紙片と引き換へに入手に渡した年の秋曾祖父様は死ぬる。その後にあたつた祖父様の代になつての零落は、ます／＼無惨な者であつたとばゞ様はいふ。一夜の野分に吹きたふされた瓜小屋にさへ少からぬ秋のあはれは見ゆる。ましてこれは由緒ある家の衰亡の悲劇である。寿美子はその話をきく度に涙が出る。よくもまあそんなに綺麗さつぱりと何にもかもなくなつたものだとおもふ。まことに其の悲劇の形身としてばゞ様

の手に残された物は、一卷の系図の巻物と数百年の苔の厚い累々たる墳墓ばかりである。ばゞ様は早くから祖父様に先だたれる。相続あつくりの子供にも見すてられるといふ不幸の数々をなめて、ひとりその系図と墓をまもつて余命を送つて居る。家は勝隆寺といふ禅寺あんなの庵を借りて居るので二間しかない。しかし江藤家累代の墓地はすぐその庵の後になるから、ばゞ様は墓場に同居して居る様なものである。ばゞ様は夫が嬉しいから其狭い庵を離れ憂がるのかもしれない。寿美子の家に来て安樂に送つてくれといつても決して承知せぬ。自らそゞぎ自ら焚く尼の様な生活である。

寿美子は今その庵あんなの椽側に花呉塵を布いて、ばゞ様と二人で栗むきを始めて居る。その栗は勝隆寺の和尚様が、今朝御法捨の帰途に裏山で少し見つけました、熊本のお嬢さんには珍らしくると云つて、大きな鉄鉢にこぼるゝほど入れたのを、わゞゞ自分でもつて来てくれたのである。みんな粒々に実が入つて石の様にかたい。寿美子は其かたい上皮を小刀の先でそいでむき、むいてはそぐ。ばゞ様を見て居ると容易い様だけれども、なれぬ手には中々骨である。そがれた皮の尖が爪の間に折れこんだりして痛い。白百合花の五弁を並べた様な美しい指先が、濃い爪紅をさした様に赤くなつた。

「どれゞ、これはいけん、痛みはせんな？」とばゞ様はふと寿美子の指先に気がつく。

「いゝえ、何ともないわ。」

「何ともない事があるもんか、いけん、そんなお雛様の様な手に栗むきをさするちうがばゞ様の落度ぢやつた、痛むならとんと止めさんしや！」

「いゝのよばゞ様、心配しなくても大丈夫なんだから……而してほら昨夜の話のつゞきをして頂戴な、ねえ、約束したんぢやありませんか、よう。」と寿美子はばゞ様の眼鏡のかほを窺いて甘えて見る。

「ほゝほゝほ、おかしな子ぢやのう、何でそんな昔話が聞きたからう。」

「だつておもしろいぢやありませんか、ねえ、お父様はその時分に以前からお母様の事を知つてたんでしやうか？」とそろ／＼話の糸口をたぐりかける。前夜の話といふのは江藤家の昔の事から、寿美子のお母様がお父様にお嫁入りをした当時の、二昔まへの興味ある物語になつて居るのである。

「まあ考へて見たつて、三重は熊本から二十五里も離れて居る田舎でしやう、夫にわざ／＼こんな所からお母様を貰ふなんて妙ぢやありませんか、どうして貰ふ様になつたんでしやう？」

「どうしてというてお前、夫は竹田の叔父様が昔から我家の事をよくしつて居るのでな、お前のお父様がお嫁さんを探す時に、ぜひこの女むすめをというて勧めたのと、夫まではお前、お父様はお母様の顔一つ見たことはないわな。」とばゞ様はとうと釣りこまれて話し出す。

むかれた栗は洩染の繻袴一枚にされて前の小桶にしがみ合つて居る。寿美子の手にかゝつたのは繻袴の下までそがれて、クリームの様な肌肉を見せて居るのさへある。

「夫からどうしたの？」

「夫から、ぢやまあとにかくその女ひとの様子丈でも見度いといふのでな、お父様がわざ／＼熊本から

尋ねて来たのぢや。」

「まあ！ 何と云つて？」

「何と云うてもお前、そんな事をはじめからかう／＼と知らせて来る人はいわな、たゞある日の夕方な、二人づれの旅の人がな、お家には若沖の花鳥の幅を御秘藏ちやさうなが、ちと拝見は出来ますまいかと、をかしな事を云つて来たのぢや。」

「ほゝほゝほ」と寿美子はおもはず吹き出す。

「その時は何にもそんな事で来たとは思ひもよらぬ事ぢやし。夫に見た事もない旅の人で氣味が悪い。そんな物は早くに払ひ渡して今では何にも所持しませんと云うて断つたがな。それがその後からきくとお父様と番頭の弥七どんぢやつたのぢや。」とばゞ様もふゝと笑ふ。

「誰が会つたの？」と寿美子はどうそのときのお母様の何にも知らずに済したかほを想像しながら、わざときく。思ひ通り、

「お母様ぢや。」とばゞ様はいふ。あら、まあ、とうと見られて仕舞つたと寿美子と思ふ。

「わしがちやうど風邪で臥つて居つたからな、お母様はそんな人達とは夢さらしらずぢや。昼に洗ふた水髪を紅絹の切つ端で結んだまゝ応対したのぢやわな。」

「どんなに美しかつたでしやう？」と寿美子は幻影を追ふ様に目を細うする。

「いゝ器量ぢやつたわな。」と生んだばゞ様が許すほど真実に寿美子の母は美人なのである。寿美

子はその時のお母様の水髪は尊いものだと思ふ。女の島田の結立てなら五六日目には見られる。併し美しい人の美しい水髪のすがたは容易に見られるものではない。而してまた水髪の美しさは平常と異ふ美しさを見する。桜の艶なるを白蓮の気高きに変ずると思ふ。

「夫ですぐ熊本から貰ひに来たの？」

「あゝ、竹田の叔父様の口入れで、所が其所に困つた故障があつてな。」

「故障つてどんな？」

「その時分我家の世話をして居たのが、其所の大隅屋のをぢ様というて遠い親類ぢやつたのぢやがな、其人が其家の秀さんといふ総領とお母様さんを夫婦にしやうとする。お母様は秀さんには死んでも嫁かぬというて、仲人の顔を見ると氣を引きつけるといふ騒ぎの中ぢやつたのでな、中々都合よく話が行かぬわな。とうと竹田の叔父様が間に立つて、何でも竹田の家にお母様を預けてくれといふ事になつたのぢや。お祖父様は早う亡うなつて居るなり、相談をする人はなしでな、わし一人両方の板挟みになつて、真実に術なかつたわな。」と物がたつてばゞ様は、しみぐと二十年前の辛さを新しく感じ直した様な体である。

「さぞねえ。」と寿美子もさそひ込まれてばゞ様に同情する。

前の小庭に当つて居た日影が先方の森にうつつて、一叢の白萩が暗くなる。森の間には本堂の棟瓦がその日影を反して水銀色に光る。その時びいゝゝゝとけたたましい鳴き声を立てゝ一羽の小鳥

がとんで来た。何といふのか頬の赤い可愛い鳥である。木槿垣の上にそつととまるとその羽にふれた白い花が左にしなふ。とたんに花のかげから細い鵜竿の先が二寸ほど顔を出す。夫を見つけると又びい／＼と鳴いて小鳥はまひ立つ。大分追ひまはされて疲れたものと見えて、遠くも逃げえずに軒の側の木屋に来て又とまる。垣の間から白い坊主あたまがちらりと見えた。

「あれお小僧さんぢや、わるさをなさんすなえ。」とばゞ様が垣ごしにその坊主あたまを叱るとばた／＼と藁草履の音が逃げて行く。鳥はびい／＼とないて又木屋を舞ひ立つ。

下

庵の入口の戸ががらりとあいて、

「お隠居さん！」といふ女の声をする。

「あら誰か」と寿美子が立たうとすると、

「お元ぢやろ、行かんでもいゝ。お元な？」とばゞ様は椽側から入口の方を呼んで見る。

「えゝ、何所で御座りやんす？」

「椽側ぢや、その柴折から曲らんし。」

カラ／＼といふ下駄のおとが敷石の上に響いて、右手の小さい柴折からお元が這入つて来る。お元はもとばゞ様の家の奉公人で、寿美子のお母様が熊本にお嫁入りの時には、付きそひとなつて一年許り

熊本に来て居た事もあるといふ。今では町の髪結女である。

「今日はよいお天気で……」とお元は椽の前に来ると丁寧にお辞儀をする。小さい銀杏返しに葛引きの根がけが意気である。

「まあお上りなさい。」

「えい、栗飯が出来やんすか。」と愛想よく桶の栗を窺いて、

「もう大分実が入りやんしたな、これが甘うなると松茸が香り出しやんす。今度一雨しやんしたら、一日向のお山にお供いたしやんしよ。」

「さうぢやな、おひ／＼露が冷うなつたで、又これからは茸狩ぢや。さあまあ上らんし、もう見ゆる頃ぢやと思つてな、昨日あたりから待つて居たのぢや。」

「どうも済みやんせん、ちよいと上らう／＼と思ひながら……御免なさりやんし。」と云つてお元は上る。

これはばゞ様の髪あげに來たのである。ばゞ様の髪はもう半分白髪を交へて居て、鼠の尻ツ尾位のしかない。夫でも切り下げは勿体らしくていやぢやと云うて小さいねぢ髷にとりあげる。夫を楊子ほどの銀簪で、ちよいととめるのが極りである。單に夫ばかりならわざ／＼お元の忙しい手を煩はすにも当たらない様だけでも、ばゞ様がぜひ時々お元を必要とする理由は他にある。夫は白髪を抜かせるからである。かう云ふと何んだかばゞ様に不似合なお洒落をする様でおかしく聞えるが、決して左様

ではない。白髪というても抜くのは極く生えたての短い物ばかりで、夫がむづ／＼と痒くて堪らぬから取らせるのである。殊に二三分の頃なのが一番いけないのださうで、銅鑪おやくわんになつてもいゝから抜けといふ。抜いた毛穴の一つ／＼からは涼しい風が頭の底まですーと浸み込む様で、何とも云はれぬ心もちになる。これをばゞ様は、

「あゝ、極楽詣りぢや」と称して居る。

今日も亦その白髪抜きをはじめ。お元は胸から白い前掛をかけて、まづばゞ様の右の鬢から抜きかけた。生際から後方に細い「毛条けすぢ」の尖で五寸ほど分け目を作ると、分け目の中には二分三分といふ位ゐる短い白髪が、山道のすゝきの様にずらりと並ぶ。夫を前から一本一本丁寧に抜いて行くので、中々根氣のつきる仕事である。従来これまで大分取らしたと見えて、頭の地がところ／＼禿になつて居る。その禿山を斜に秋の日がすべる。夫と共にお元の手にある真鍮の毛抜きがびかりびかりと光る。

「お嬢さんは毎日お退屈で御座りやんしよ、こんな田舎において、何一つ見る所もなしな、あの内山の観音様には詣りやんしたか？」とお元は白髪をぬき／＼側の寿美子に話しかくる。

「いゝえまだ、でも一度ね、幼い時にお母様と来た時にお詣りした事はあつてよ。」

「へえ、さうで御座んすか、御隠居さんはこの通り一向外に出らんお方ぢやからな、田舎で見物するやうなものも御座んすまいけれども、ちつとは貴女町方にもお出でゝ見なさりやんし、お若いのにこんなお寺の中許りではな、お氣が陰いんになりますわな。」とお元は自分一人から割り出した親切をふ

りまく。

「何のお元、この子は外出がすかんのと。毎日家に許り居つて、昔話をしよ／＼とわしをせがんで困るわな。」

「あらばゞ様が非い事を……」

「ほゝほ、でも偽ではなからうがお前、あさう／＼あの話ならお元が一番よう知つて居るはずぢや。今日はお元からきくがいゝ、なお元。」

「え？」とお元は何の事か一寸返事に困る。

「いゝえ、あの何ぢや、先刻からお政が熊本にお嫁にいつた時の話をさせられて居たのぢやわな。お前がよう話して聞かせてくれんし。妙な話をきゝたがる子ぢやのう。」とばゞ様はにこ／＼する。

「あゝ、あのお話で御座りやんすか、そんなら夫はお元が誰よりも委しう御座んすわな。ほんとに芝居よりも美しい御祝言でな……」とお元は早や乗り地になつた。それから後の毛抜には、少々黒いのが交つたかもしれぬ。

まづ第一に竹田の叔父様の家まで熊本から十輦の人力車が、二十五里の山道を前日から迎ひに廻された事から、お元ははじめた。お元はその時はじめて人力車といふ物を見たのださうな。其時お母様は十九、お元は十八。親名代として行つた清様といふお母様の弟が十七。昔ならばふりそでに前髪立ちといふ姿であつたらうが、地味な黒紋付に袴の膝を正して、ちゃんと上座に肅座かしこまつた時は、しほ